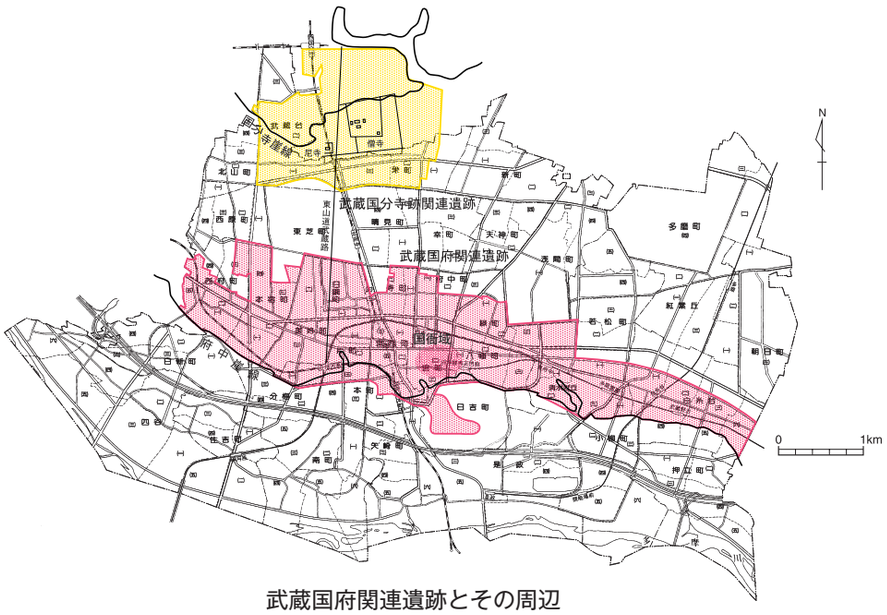
4 奈良時代の府中

(1) 武蔵国の国府

大宝律令（701年）によって律令制が完成されるころには、武蔵国（現在の東京都、埼玉県と川崎市、横浜市の一部）が設置され、府中にはその中心とも言うべき国府が置かれ、都から国司が派遣された。

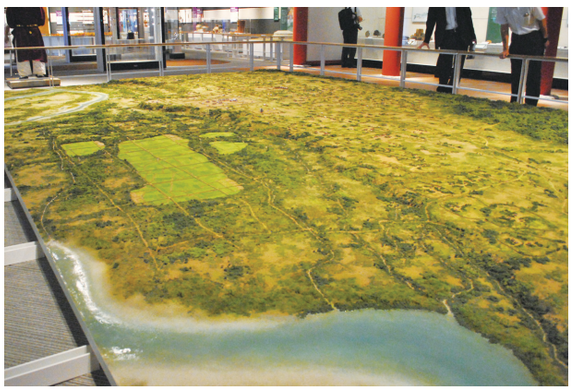
国府には、その一国のあらゆる政治を処理するために様々な施設が造られた。その中で最も重要な役所が国庁であり、それを含む役所群が国衙である。

武蔵国の国府の規模や国庁の配置などを明らかにするために武蔵国府関連遺跡の調査が進められ、1977年（昭和52）に大國魂神社の東側から、大規模な礎石建物跡と掘立柱建物跡が発見された。



武蔵国府関連遺跡とその周辺

掘立柱建物跡



国府のマチを再現した模型（郷土の森博物館）

課題 武蔵国府跡（国衙地区）へ行き、国府の発掘について調べてみよう。

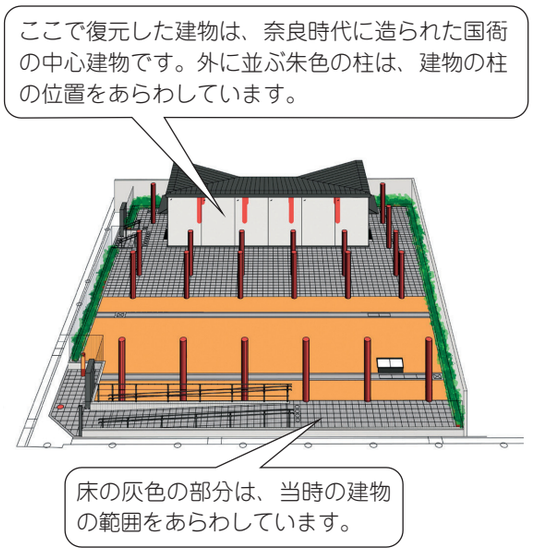
⑵ 武蔵国衙と国庁

武蔵国の国庁の全体像は十分に分かっていないが、国庁を含む役所群である武蔵国衙は、これまでの発掘調査により宮町2～3丁目に所在したことが判明している。

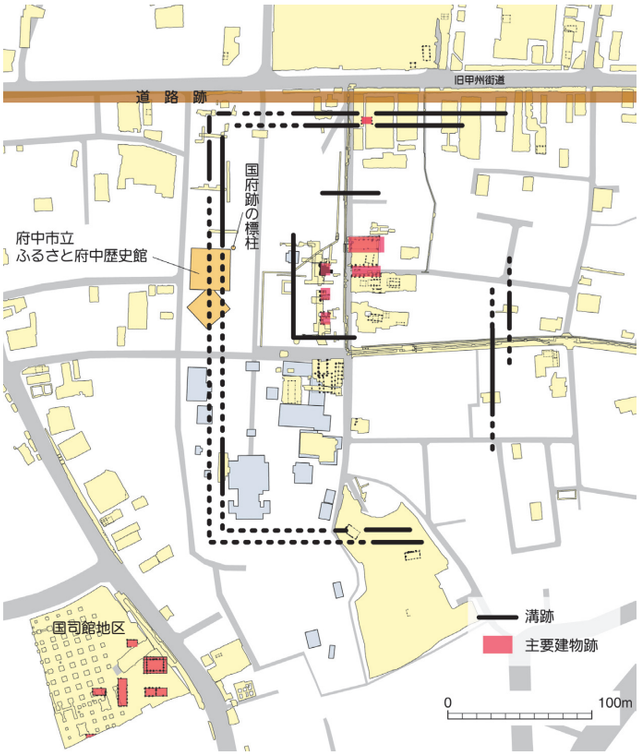
国庁は、築地塀（つきじべい）で囲まれており内側の広場を囲むようなコの字形に前殿・正殿・後殿・脇殿が配置されたものと推定されている。2008年（平成20）、武蔵国府跡（国衙地区）として建物の範囲や掘立柱が復元された。

大型建物跡の発掘風景
（白線が柱穴の跡）

柱の復元



国衙の発掘調査の成果



灰色のタイル部分が建物跡

ふるさと府中歴史館

⑶ 瓦と塼（古代のレンガ）

国衙などの建物に使われたと思われる瓦や塼は、大國魂神社付近から多く発掘されており、中には文字がスタンプされていたり、ヘラで書かれていたりした物もある。これらの文字は当時の武蔵国の郡名と一致するものが多く、役所の建設に当たり、各郡が分担して瓦や塼を納めていたことが分かる。

「国」と墨書きされた土器

大型建物の基壇に使われた塼
（古代のレンガ）

八葉蓮華文軒丸瓦

文字瓦

塼

各郡から納められた瓦に見られる郡名

⑷ 役人・貴族の生活

武蔵国府関連遺跡から発掘された遺物の中には、国府の役人として仕事をしていた貴族などの生活がしのばれるものがある。

役人の必需品である文房具として、硯や水差しに使われた土器が発見されており、国府の役人が墨で木簡※1に文字を書いて事務処理をしていた様子が想像できる。

革帯につけられた方形やかまぼこ形をした装飾品には、鉄製や黒漆を塗った銅製、石製などのものが発見されており、国府にいた貴族の官位の違いを示しているようである。貴族のものと想像される釉をかけて焼いた 陶器（緑釉陶器や灰釉陶器）のような 貴重品も発見されている。

古代の文房具（硯、水さし、ナイフ、木簡、筆）

◀墨書土器「守」

▲墨書土器「国」

革帯に付けられた金具（銅製）

緑釉陶器

灰釉陶器

課題 郷土の森博物館やふるさと府中歴史館へ行って出土品を観察し、どのような人たちがどのような品物を使っていたか比べてみよう。

(※1) 木簡　文字を書くために使われた細長い木の札

⑸ 庶民の生活

庶民の生活の様子については平城京跡から出土した木簡を手がかりとして知ることができる。木簡には当時、武蔵国から都にどのような物が納められていたかを記録している物がある。

また「万葉集」には武蔵国から九州の大宰府へ防人として行った人々の家族の歌が載せられている。律令体制のもとで租庸調や兵役など多くの役務を負った人々の生活が浮かび上がる。

一方、国府に住む庶民の住居跡やそこで使用された須恵器、土師器といった土器からも庶民の生活の様子がしのばれる。

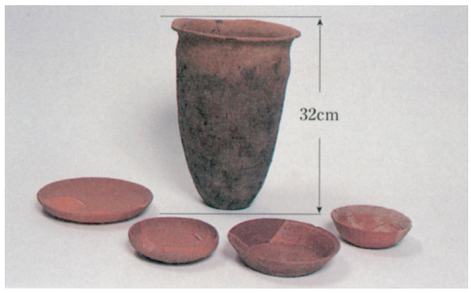
ハケから1㎞くらい離れた寿町からは、1976年（昭和51）に「まいまいず井戸」のような古代の井戸の跡が発見され、水に乏しい武蔵野台地に暮らすための公共整備が行われていたことが分かる。

武蔵国男衾郡餘戸里
大贄豉一斗
天平十八年十一月

◀木簡（郷土の森博物館）

赤駒を
山野に放し
捕りかにて
多摩の横山
徒歩ゆか遣らむ

◀万葉歌碑（郷土の森博物館）



土師器

須恵器

古代の大型井戸跡（府中町2丁目）

復元されたまいまいず井戸（郷土の森博物館）
（深さ10m）

課題 郷土の森博物館やふるさと府中歴史館へ行って、万葉歌碑や発掘された土器などを見学し、当時の農民の生活についてまとめてみよう。

⑹ 武蔵国の国分寺

奈良時代、聖武天皇の命により、全国に国分寺と国分尼寺が造られることになり、武蔵国では、国府の北約2㎞の場所に概ね東西1.5㎞・南北1.0㎞にわたる全国一の広さの敷地を有する国分寺が造られた。現在の国分寺市西元町を中心に、一部は府中市武蔵台、栄町にも広がる武蔵国分寺跡からは、大量の瓦と共に金堂や講堂、七重の塔などの重要な建物の礎石などの痕跡、金属製の装身具や高級な焼き物、農民の住居跡や土器や農具、道具類が発掘され、当時の様子がしだいに明らかになりつつある。発掘の結果から、本尊仏（釈迦三尊像）を安置する金堂は東西36.1m・南北16.66m、七重の塔は10m四方で高さが60mもあったと推定されている。

武蔵国分寺パノラマ復元模型図（武蔵国分寺跡資料館）

⑺ 武蔵国分寺の文字瓦

武蔵国分寺跡から発掘されたものは現在まで50万点に達し、その大半が屋根瓦である。国府の瓦と同じように、スタンプやヘラなどで書かれた文字瓦が多量にあり、その文字を調べることによって、様々なことが分かる。

郡名は国府の場合と同じだか、郷（郡の下でムラに当たる）や人名まで書かれたものもある。人名瓦は全国的にみても珍しい物である。その他、絵や記号、意味不明の文字が書かれた物も発見されている。

整備された武蔵国分尼寺跡（国分寺市西元町4丁目）

豊島郡の「豊」

秩父郡の「父」

人の顔

動物の絵

戸主刑部大麻呂

⑻ 武蔵国分寺と武蔵国府

府中市北部（栄町3丁目）で発見された武蔵国分寺の参道口の門柱跡は、武蔵国分寺の中門から南に向かってのびる参道の南端に位置する。武蔵国分尼寺と武蔵国府を結ぶと推定される道路跡との交点が見つかったことから、古代の武蔵国府から国分寺や国分尼寺へ人々の行き来があったことが分かり、国府と国分寺との密接な関連を証明するものとして注目されている。

東山道武蔵路（とうさんどう むさしみち）は、武蔵国と都を結ぶ幹線道路で、路面の両端には側溝が設けられ、幅は12mもあった。

武蔵国衙跡と武蔵国分寺跡を結ぶ道路

白線部分が道路跡

整備された参道口跡

5 平安時代の府中

(1) 武蔵武士のおこり

平安時代の後期、地方政治の混乱が続いている間に、全国各地で武装した豪族が現れ、やがて彼らは武士として成長していった。

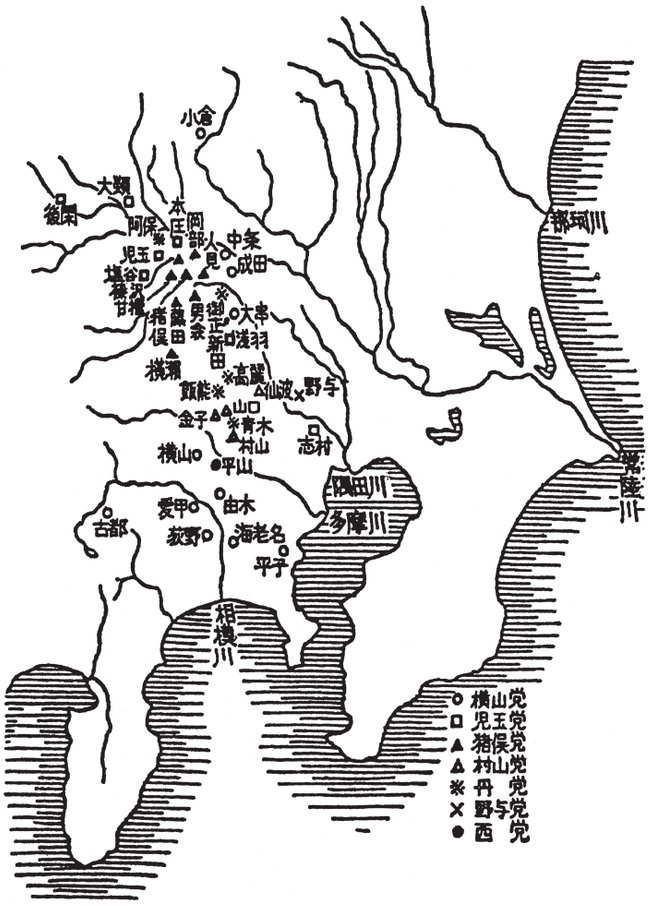
武蔵の地では、武士として名をあげた人々が次々と登場してくるが、中でも、『武蔵七党』と呼ばれる七つの武士団が有名である。

党というのは同族から発達した小集団のことで、戦いなどのとき一致団結して戦った。

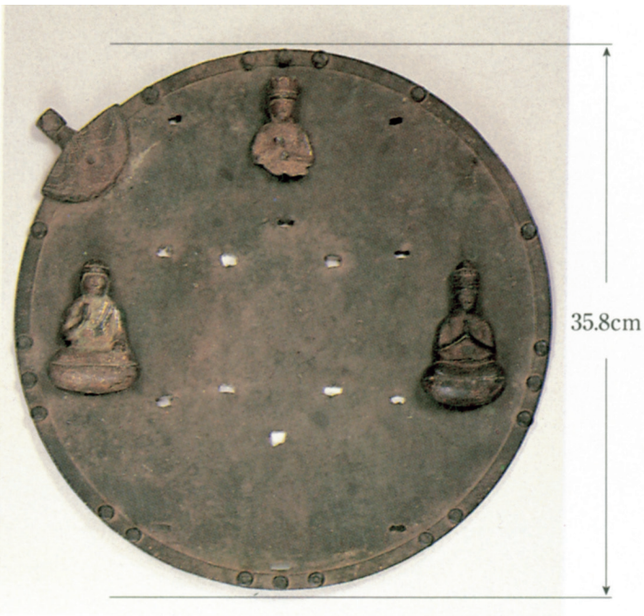
この七党には諸説あるが「野与（のよ）・村山（むらやま）・横山（よこやま）・猪俣（いのまた）・児玉（こだま）・丹（たん）（丹治（たんじ））・西（にし）」の七党を指す説が有力である。

これらの党の多くが『牧（まき）（牧場）』に関係をもっている。これは、武士の発達に牧が重要な役割を果たしたことを示している。

是政（これまさ）の鹿島（かしま）神社に、市指定文化財となっている『懸仏（かけぼとけ）』がある。その銘文（めいぶん）から、『刑部宗弘（ぎょうぶむねひろ）』という人の名を読むことができる。 また、この神社の付近は、「横山屋敷」と呼ばれていた。



武蔵七党分布図（「目黒区史」より）
野与党（のよとう）は私市党（きさいちとう）とも言われる



鹿島神社（かしまじんじゃ）　懸仏（かけぼとけ）

⑵ 武蔵国府と武士の活躍

10世紀の前半に武蔵の豪族の間に争いが起こり、平将門が武蔵の国府に侵入する事件（承平の乱935～940年）があった。このころ東国に勢力をはったのは平氏である。

彼らの多くは国司として東国に地盤を築き、その子孫が豪族となったものである。後に、『板東八平氏』と呼ばれるまでに発展した。

源氏は、源経基やその子満仲が国司などになり、満仲の子頼信は平忠常の乱（1028年）を平定し、名をあげた。

この中で、東国の武士と強いきずなを結んだのは源頼義とその子八幡太郎義家であった。

源義家像（ケヤキ並木）

源頼義と義家父子は、武蔵の国司などに任じられた後、東国の武士を率いて東北地方の豪族安倍氏と戦い（前九年の役1051～1062年、後三年の役1083～1087年）、勝利をおさめた。頼義・義家父子は、出陣のとき大國魂神社に参拝し平定できるように祈り、乱をしずめた後、ケヤキの苗木千本を奉納した。それがケヤキ並木の初めだと伝えられている。

⑶ 武蔵総社と大國魂神社

国府には国庁という役所のほかに、国分寺（寺院）と総社（神社）が置かれた。

国府の総社は、その地方の祭神を一カ所に祭るところで、都から来た国司はその土地の総社に参拝することも仕事の一つであった。

武蔵国の国府がおかれた府中に武蔵の総社があり、大國魂神社はかつて「六所宮」と呼ばれていた。大國魂神社という名は、明治になって改められた。

大國魂神社拝殿

大國魂神社本殿

(4) 大國魂神社と神話

大國魂神社は言い伝えによると、大和朝廷（やまとちょうてい）が全国を支配するようになった頃からは代々の国造（くにのみやつこ）が、また奈良時代以降は国司が祭礼などを行う武蔵国の中心的な神社として人々から信仰を集めてきたようだ。「まつはきらい」という神話は、祭神のオオクニヌシノミコトを主人公としている。

まつは　きらい

むかしむかし、大國魂の神様がおとものハ幡さまといっしょに天から府中の町へおりてきました。

大國魂の神様は、

「ここは緑豊かで、水もきれいな所じゃ。わしは、この町にお宮を建てて、住むことに決めたぞ。」

と言いました。ハ幡さまは、

「それでは、私がお宮を建てるのに良い場所を見つけてきましょう。」

と言って、大國魂の神様と別れて、手頃な場所を探しに東の方へ行きました。大國魂の神様は、その場所に座って八幡さまの帰りを今か今かと待っていました。

ところが、何日たってもハ幡さまは帰ってきません。

実は、ハ幡さまは大國魂の神様と別れたあと、すぐに手ごろな場所を見つけたのですが、自分が気に入ったので、そこにお宮を建てて住んでいたのでした。

ハ幡さまは、そこにハ幡山と名付けて満足に暮らして、大國魂の神様のことはすっかり忘れてしまっていたのでした。

一方、大國魂の神様はハ幡さまの帰りをずっと待っていたのですが、いっこうにもどってくる様子がなかったので

「さてさて待つ身はつらいものじゃ。まつはきらい。」

といってその場所にお宮を建てて住むことにしました。

それ以来、「待つ」を「松」にたとえ、大國魂神社の境内には松を植えないことにしたのです。また、府中の町の人々も正月には門松ではなく、竹だけで作る「門竹」を立てて祝う習わしにしているのです。